

私の読書日記

池澤夏樹

作家



ないから書かないでおこう。その偶然が明らかになった時、マリアは言うのだ。「これって冗談よね？何かアホなギャグよね、そうでしょ？」
これをきっかけに主人公の人生は急転回する。だから読んだ方は考え込んでしまうのだ。すぐおもしろいけれど、しかし「アホなギャグ」を二度使うのはやっぱり小説としてルール違反ではないのか。

偶然と難問、「5」と廃炉

×月×日

人生は出会いである。
すべての出会いは偶然だから、人生は偶然に大きく左右される。人の一生は自ら作るものである以上に、そうやってしまふもの。なりゆきというものはなかなかいい言葉だとはよく思っている。

×月×日
人生は偶然に装った必然によって決められる。この思想を表現するために英語にはシンクロニシティという言葉がある。この主題の上にならずに、小説が構築できそう。

しかし、人が「偶然の出会い」というのは実は二度目のことだ。気の合う異性と知り合っ、恋に落ちる。そこまでは当たり前。毎日誰かと会っているのだから、相手によっては恋が生じることもあるだろう。最初の出会いは敢えて偶然と呼ぶに当たらない。

×月×日
ラブルの「再会」という短編(岩波文庫『20世紀イギリス短編選』)を挙げておこう。この話の場合、厳密に言えば再会は偶然ではないのだが、そのところがまたうまくできている。

その二人が別れて、音信もなくなった末、十年後にコペンハーゲンあたりの街頭でばったり会ったとしたら、これは偶然の出会いである。その結果、恋が再燃して十年の間に築いたそれだけの家庭を壊してしまうこと

×月×日
語りは作家。全体としては彼よりも少し年上の別の作家の半生の物語。いや、二人の運命はもっと深く絡み合っているか

ら、彼らの物語というべきかもしれない。年上の方が執筆をやめて、身を隠し、アメリカ中の自由の女神像を爆破してまわるテロリストになって、最後に事故死するまで。
なぜ彼がそんなことをするようになったかという大きな謎が最初にかかっているから、プロットが生きていく。偶然が人の生を左右するというのはオースターの思想の柱なのだろう。偶然が与えたものの意味を考えるうちに人は確たる方針を見出す。偶然を啓示と受け取る。だから例えればフォークナーの『野生の棕櫚』では貧乏ゆえに恋を諦めた二人の前に、たまたま千二百七十八ドルが入った財布が降ってきたのだ。



×月×日
真理は小説以上に奇である。十七世紀フランスの数学者フェルマーが単純明快な予想を立てた――
において、nが3以上の場合、これを満たす自然数の組は存在しない。彼はこれを記したメモの余白に「私はこの命題の真に驚くべき証明をもっているが、余白が狭すぎるのでここに記すことはできない」と書いて死んだ。思わせぶりな奴だ。

文春図書館

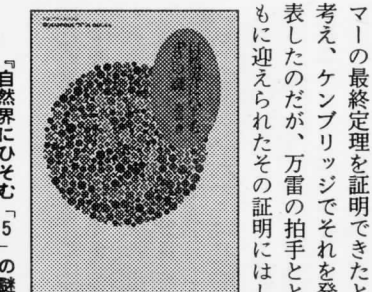
nが2の場合は誰でも知っているピタゴラスの定理である。これを満たす自然数の組は「3、4、5」とか、「5、12、13」、「20、21、29」あるいは「99、4900、4901」など無限にある。だが、nが3から上になつたらもう一つもないとフェルマーは言った。証明してないのだから予想にすぎなかったが、これが「フェルマーの最終定理」と呼ばれるようになった。これが簡単に見えてどうしても証明できない。数学者たちはこの難問と三百年間格闘を続けた。「存在しない」を証明するのだから一つでも反例を見つければひっくり返せる。最近になってコンピュータが使えるようになり、力づくでnが400万までにはないことが証明された。しかし、3から400万までよりも400万から無限までの方が長いのが数学である。そこが工学のような応用科学と違うところだ。

一九九四年にアンドリュウ・ワイルズというイギリスの数学者がこれを完全に証明するまでの話が『フェルマーの最終定理』(サイモン・シン著 青木薫訳 新潮社 二二〇〇円+税)。

一見単純に見えて実は複雑怪奇という罫のようなからくりがすごい。自然は、あるいは宇宙の原理は、時として相当に意地悪である。「神は隠しごとをするけれど、しかし悪意があるわけではない」というアインシュタインの言葉思い出してみても、「フェルマーの最終定理」と「四色問題」の場合は相当に悪意に近い。だから謎解きはおもしろいし、その報告はドラマチックになる。

×月×日
数学の啓蒙書を書くのがむずかしいのは、読み手のレベルを考へなければならぬからだ。初歩的なことを説明しながら高等な論理の宙返りも伝える。この本はそれが実にうまい。このテーマについては前にもアミール・D・アクセルの『天才数学者たちが挑んだ最大の難問』(吉永良正訳 早川書房 一八〇〇円+税)という本があったが、さまざまなエピソードを編み込んで数学史を辿り直す語り口の点でサイモン・シンの方に一日の長がある。

×月×日
ワイルズは実はゴール直前で地獄に落ちた。七年前、一人でこつこつと研究を重ねてフェルマーの最終定理を証明できたと考え、ケンブリッジでそれを発表したが、万雷の拍手とともに迎えられたその証明にはし



かし決定的な欠陥があった。神はまことに意地が悪かった。それから十四カ月の間、彼はふたたび一人で苦闘を重ね、最終的に完璧な証明を提出した。いい話ではないか。

×月×日
謎に挑戦するのは誰でもできる。西山豊の『自然界にひそむ5の謎』(筑摩書房 一二〇〇円+税)がいい例である。

×月×日
去年九月三十日の東海村臨界事故はいろいろな意味でショックだった。第一にはまさかの臨界事故だったこと、第二に炉やその周辺ではなく核燃料工場で起きたこと、第三に偶発的な要因を含まない純然たる人為的な事故だったこと。

原原子力発電所は今すぐ

形では覆えない。外接円に対して五角形の一边はひどく半端な数値になる。この謎を著者は強引に解いてゆく。

×月×日
話はおちこちへ飛ばし、提案してすぐに無理と気づいて引込める仮説も多い。三弁・四弁・五弁の花を論じながら、著者がいかに多弁。

×月×日
いささか理数の素養があるという程度の読者を納得させる結論をちゃんと出すのだ。卵細胞の卵割から三十二面の準正多面体に至るところは見事である。覆うべきは平面ではなかった!

×月×日
問題は官僚の頭の硬直なのだ。彼らはいずれ事故で十万人を殺すかもしれない。しかし、今の彼らにはその事態に思いを馳せる想像力が欠けている。老朽化した炉よりもこちらが恐ろしい。

×月×日
ぶん不幸な立場に立たされていく。反対派は綿密な論議をしようとしているのに推進派(というよりも現状維持派)は土俵に上らない。すれ違いの中で炉そのものはどんどん老化してゆく。『廃炉時代が始まった』(館野淳著 朝日新聞社 一九〇〇円+税)は話が具体的で説得力に富む。日本の炉の一つ一つについて危険性を解析し、限界を超えていると思われれば炉の廃棄を提案する。全面的な原発反対でない分だけ口調が冷静で、読む者を納得させる。より安全な炉の話はこの分野にいささかの希望の火を灯す。

立花隆、鹿島茂、池澤夏樹、乃南アサ、井上章一の五氏の読書日記を毎週交代で掲載いたします。

153

寒い冬は、手軽に湯染め。ダイロン マルチ 湯染めには DYLON 電話 03-3476-5641

×月×日
細部がいかに上手にリアルに書いてあっても、全体からはリアリティーが抜ける。主人公はおそろしく運が悪い男になってしまふ。登場人物に対して作者の権限が強すぎる。それでもゼッタイにオススメに変わりはな

×月×日
若くてアメリカらしい。登場人物がみんな波瀾に満ちた生きかたをしていて、それぞれに魅力がある。中でもソフィ・カルをモデルにしたというマリア・ターナーが格別。そういう意味ではゼッタイにオススメである。

×月×日
問題はいかにその回数だ。この小説の中ではそれが二回起こる。マリアがたまたま拾った住所録にあった二百以上の住所の一つを訪ねて行って待っていたら、家から出てきたのは彼女が故郷マサチューセッツで仲のよかつた級友だった。これが第一。

×月×日
第二の方はもっと深刻だが、ミステリの種明かしになりかねない。

×月×日
この小説以上に奇である。十七世紀フランスの数学者フェルマーが単純明快な予想を立てた――

152